

## 設立 50 周年の節目を迎えて

若尾真治 \*



新年明けましておめでとうございます。日本太陽エネルギー学会（Japan Solar Energy Society: JSES）の会員の皆様にとって、本年が素晴らしい一年となりますようお祈りいたします。

昨年もいろいろな出来事がありました。それらを振り返ったとき、真っ先に思い浮かぶのは震災や地球温暖化による気候変動です。元旦に発生した M7 を超える規模の能登半島地震、それに追い打ちをかけるように 9 月には能登半島で豪雨災害が発生しました。このようなニュースを見るたびに、心が痛むと同時に、エネルギーインフラの重要性和カーボンニュートラルの必要性をあらためて痛感します。今年で阪神・淡路大震災から 30 年、東日本大震災から 14 年目を迎えますが、将来、南海トラフ地震も科学的に想定されています。これまでの震災の辛い経験を無駄にすることなく、未来の地球環境も視野に入れたエネルギー供給のあるべき姿について、JSES の会員の皆様と共に議論を深めていきたいと思っています。

昨年は、ウクライナやガザなど世界各地で起きた紛争が、エネルギー供給や価格に大きなネガティブインパクトを与えた 1 年でもありました。化石燃料を中心にエネルギー資源の多くを海外に依存する我が国では、地政学リスクにも対応できる頑強なエネルギー供給の姿を追求することも重要です。

このような昨今の状況の中、再生可能エネルギーの主力電源化は喫緊の課題です。これまで JSES は、太陽光発電をはじめ、太陽熱、風力、バイオマス、水力など多様な再生可能エネルギーを対象に、電気・化学・材料・建築・気象・運輸などの様々な分野で学術・教育・啓発活動を行ってきました。未来のエネルギー供給のあるべき姿を実現するには、様々な視点での研究開発とそれらの連携・融合が必須であり、広範な分野をカバーする JSES が担うべき役割は、益々大きくなると考えています。

本年は JSES 設立 50 周年を迎える節目の年です。秋の研究発表会では 50 周年記念式典を開催する予定です。これから特に以下の点に注力し、JSES の

活動のさらなる活性化に取り組みたいと思います。

1. 年 6 回発行の学会誌 Journal of Japan Solar Energy Society「太陽エネルギー」への論文投稿件数が漸減していましたが、昨年は増加に転じました。本年はさらなる投稿件数 up を目指します。
2. 研究発表会の発表件数も一昨年に比べ昨年は増加しました。研究発表会の参加者数もここ数年は微増の傾向にあります。技術分野ごとに活動している 7 つの部会において、部会長を中心にして発表・参加を広く呼びかけていただき、過去の最高記録数の更新を目指します。さらに、協賛学会を現時点での日本風力エネルギー学会 1 団体から複数団体に増やし、協賛団体からの発表・参加の促進も図ります。
3. 各部会・支部で実施するイベント回数の昨年の実績は、太陽光発電部会 3 回、太陽熱部会 2 回、100%再生可能エネルギー部会 2 回、地域脱炭素部会 2 回、風力・水力部会 1 回、関西支部 3 回と活発化しています。収益増加だけに留まらず、イベント参加者から新たに会員になっていただく方々を増やせるよう努めます。団体会員の増加も、引き続き目指します。
4. 環境に配慮し、学会誌の紙媒体から電子版への移行を進め、情報発信の拡大と迅速化を進めます。

これらの施策を通じて、再生可能エネルギー利用と持続可能な社会構築への JSES の貢献度を高めていきたいと思っています。我々が直面している環境エネルギー問題は、様々なステークホルダーが関連する極めて複雑な最適化問題です。立場が変われば、また、現在か将来かなどの時点に焦点を当てるかで目的も変わります。JSES の活動が、このような自明の解がない問題に果敢に取り組む次世代の若手研究者の育成にも大きく貢献できるものと確信しております。

本年も JSES 会員の皆様のご協力・ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

\* 一般社団法人日本太陽エネルギー学会会長  
早稲田大学 理事・理工学術院 教授